

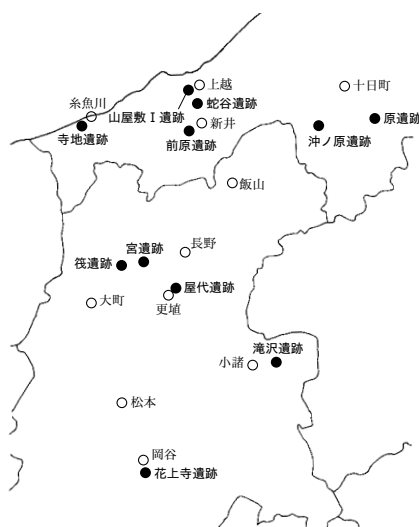
5 ま と め

前原遺跡の主体となる時期は縄文時代早期前葉・中期中葉から後葉・晩期前葉から後葉の3つの時期がある。それぞれ、かなり時間を置いて活動の場としているわけであるが、遺物の出土状況は見事なほどに重なっている。渋江川の段丘面で、治郎川によって開析された沢の縁に位置し、各時期を通じて活動しやすい場所であったと考えられる。この中で、縄文時代中期中葉から後葉の集落・住居・土器について若干まとめたいと思う。新潟県の中期の縄文遺跡については、信濃川上中流域では大規模な集落が多く検出されていることから研究が盛んに行われている。新潟県南部の上越地方では中期の遺跡の調査が少ないこともあって、これまで研究の対象とされることが少なかった。こうした中でも、近年上信越自動車道に伴う調査や『上越市史』[上越市史編さん委員会 2003]の刊行によって、上越地方の縄文中期の状況が少しずつ明らかになりつつあるといえる。今回は集落が存続した中期中葉から後葉にかけてのごく短期間の状況について検討してみた。

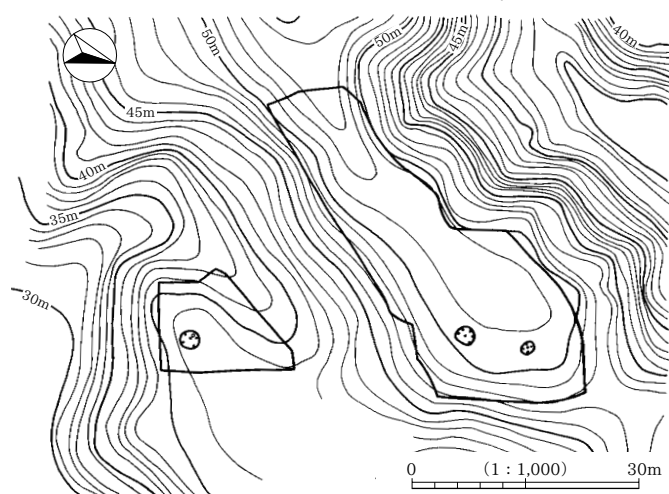
A 信越国境地域の集落と住居跡 (第30～32図参照)

上越市蛇谷遺跡 竪穴住居3軒とフラスコ状土坑1基からなる集落が調査されている。遺跡は頸城山地から延びる丘陵先端部と遺跡の南を流れる沢山川によって形成された小規模な河岸段丘上に立地している。標高約50mの北東に延びる細尾根(上段)に竪穴住居2軒と埋設土器1基(圧痕隆帯文系土器)、フラスコ状土坑1基が検出され、標高約41mで舌状に張り出す平坦面(中段)に竪穴住居1軒と集石土坑1基が検出された。上段の竪穴住居は平面形がほぼ円形で、直径約3.5mと5mである。どちらも中央部に石囲炉、壁際に周溝を持つ。中段の竪穴住居は円形で直径約5mである。形態は上段の住居とほぼ同じであるが、石囲いの炉内に土器が埋設され、炉脇にフラスコ状土坑を伴っている点が異なっている[星1996]。

上越市山屋敷Ⅰ遺跡 高田平野西端部山麓の正善寺川右岸に所在し、平山段丘の先端部近くに位置する。標高は20～30m、遺跡は東西150m、南北100mの大規模な集落跡で、環状あるいは馬蹄形を呈すると考えられている。時期は中期前葉から後葉にかけてで、中心は前葉と後葉である。中期後葉の住居も20



第30図 信越国境地域の遺跡分布



第31図 蛇谷遺跡竪穴住居配置図

棟近く存在するようであるが、『上越市史』では、住居について一部が紹介されている。15号住居跡は、平面形は円形で、直径は約4.2m、主柱穴は6本で、ほぼ中央に方形の石囲炉があり、内部に埋甕を伴っている。東西にテラスを持つ〔上越市史編さん委員会2003〕。

青海町寺地遺跡 1号住居は、北陸の中期後葉古串田新式の土器を主体としているが、唐草文系土器や大木8b式土器の搬入も見られる。住居は硬玉工房址で径約5mのほぼ円形プランを呈している。壁に沿って幅50～70cmのテラスがある。炉は長方形の石囲炉である。炉に掘り方は見られなかった。テラスの切れた部分に埋甕が設けられていた。竪穴住居への入り口部分にあたると考えられる。3号住居は中期後葉を主体とする（特に古い方）。長径4m、短径3.1mの小判型のプランを呈する。床面は貼床である。炉は方形の石囲炉である。1号住居と3号住居は隣接している〔関ほか1987〕。

長野県小川村筏遺跡 中期後葉の馬蹄形集落で、竪穴住居跡が10軒検出されている。8号住居跡は径約3.5mのほぼ円形を呈する。中心より西側に偏って石囲炉が設けられている。東と西の炉縁石が抜かれている。柱は壁際に近く、4本主柱穴である。時期は曾利Ⅱ期に比定されている。このほか、検出された住居跡は楕円形や隅丸方形のものもある〔千曲川水系古代文化研究所1991〕。

長野県御代田町滝沢遺跡 J-13号住居址 直径ほぼ4mの円形プランを呈する。周溝を持つ。柱穴は周溝内に8本確認された。壁柱穴と考えられる。炉の構築はまず床面を大きく掘り切った後、黒色土を軽く埋め戻してから縁石を据え付けている。炉内には埋甕が据えられる〔小山ほか1997〕。

長野県中条村宮遺跡 3号住居址 径約5mの円形プランを呈し、中央に方0.5mの石囲炉が設けられていた。炉縁石は抜かれているものが多かった。柱穴は壁際と炉周辺に見られた。埋甕が1基出土しているが、圧痕隆帯文系土器で、中期後葉の時期である〔千曲川水系古代文化研究所1993〕。

この時期の竪穴住居に見られる共通項

円形（直径5m前後）、小判型も若干含まれる

周溝

テラスを持つものもある

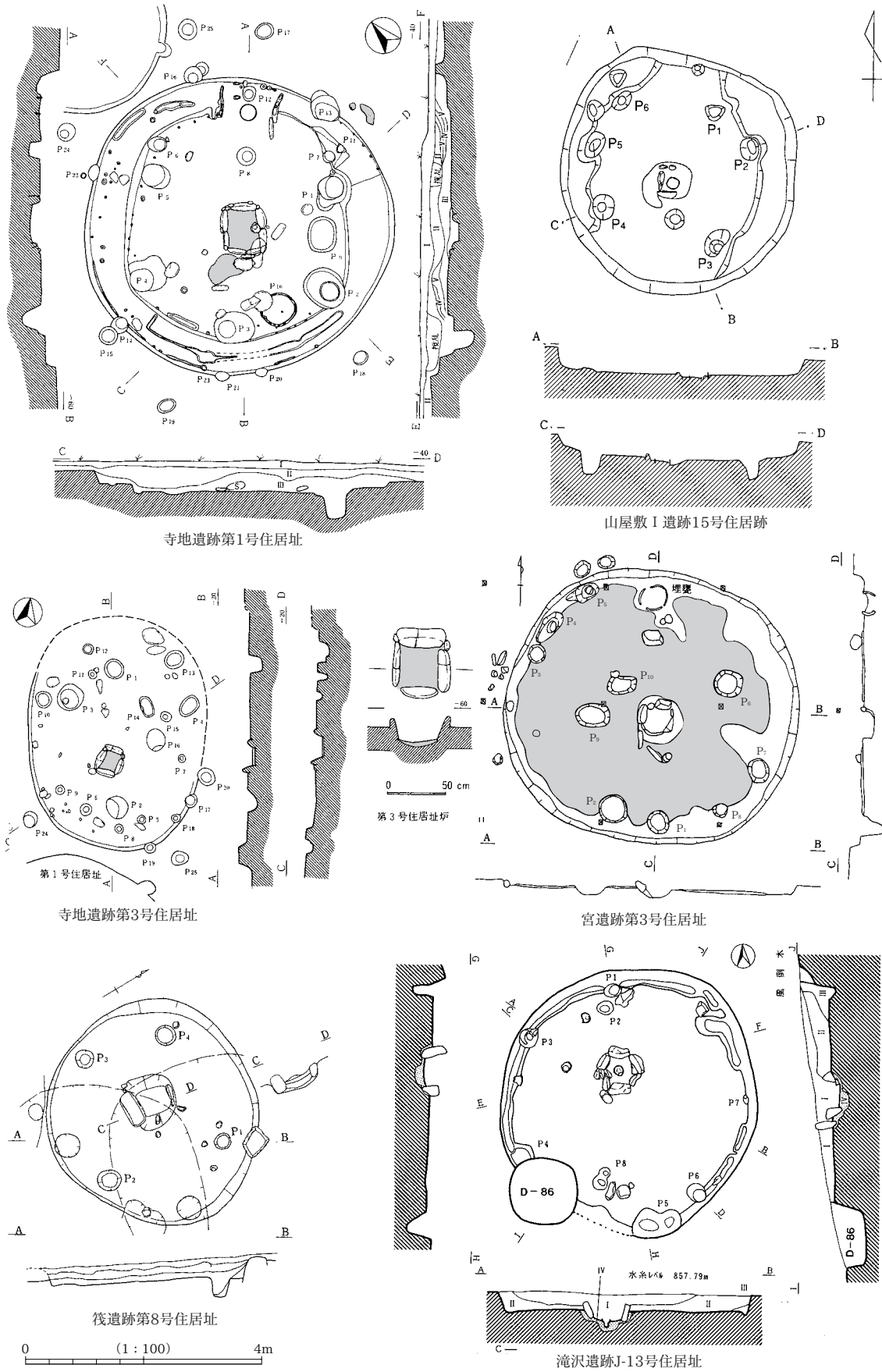
4～6本主柱穴

方形の石囲炉（掘り方を持つ場合がある）、炉内に埋甕を伴うものもある

埋甕または設置土器

上記のことから、蛇谷遺跡の3基の竪穴住居、山屋敷Ⅰ遺跡15号住居、寺地遺跡1・3号住居は、前原遺跡とよく類似している。上越地方におけるこの時期の一般的な住居形態を表しているものと考えられる。長野県では上記以外にも、戸倉町円光房遺跡〔森嶋ほか1990〕・岡谷市花上寺遺跡〔高林ほか1996〕・屋代遺跡群〔水沢ほか2000〕の住居形態も同様であり、唐草文系の土器様式に伴う中部高地的な住居形態を示していると思われる。石囲炉の中に埋甕を伴うものもあるが、石と土器の間に空間のあることを特徴とし、この時期の中部高地には一般的な炉形態である〔三上1995〕。しかし、上越地方では石囲炉のみのものと、埋甕を伴うものの両者が見られる。

この時期、複式炉を伴う卵型の竪穴住居が出現する信濃川上中流域とは全く異なる様相を示している。中部高地では、その後、加曾利EⅢ～EⅣ式土器が大量に出土する時期になると、住居形態は変化し、柄鏡形を示すものや敷石を伴うものが現れてくる。上越地方では敷石住居は妙高村湯の沢遺跡の住居が可能がある〔室岡1966〕。



第32図 各遺跡の竪穴住居